（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　李　承律

中国湖北省荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』は、1993 年に戦国時代の楚の地より出土し 1998 年に北京の文物出版社より公刊された、最新の重要な中国古代思想の資料である。

本論文は、その中の儒家系の『唐虞之道』と『魯穆公問子思』の両篇の思想内容を、両篇に見出されるいくつかの鍵をなす思想（堯舜禅譲説・尚賢論・忠臣観等々）の分析を通して、単に戦国時代の儒家の思想史の枠内だけではなく、広く春秋・戦国・秦・漢時代の他学派を含む中国思想史全体の中で把握し、両篇の思想史的な位置と意義を解明しようと試みた力作である。全体は、序、第一部 研究編（本編――『唐虞之道』、附編――『魯穆公問子思』の忠臣観について）、第二部 訳注編（Ⅰ 郭店楚墓竹簡『唐虞之道』訳注、Ⅱ 郭店楚墓竹簡『魯穆公問子思』訳注）、結、文献目録、より構成される。

序では、両篇は純然たる儒家の子思・孟子学派の作、当該楚墓の下葬年代は戦国中期とする中国で盛行している定説に疑問を呈し、両篇に関する研究史とその方法を網羅的に批判・総括しつつ、楚墓の下葬年代を推定する方法としての「考古類型学」を詳細に検討した上で、その問題点を指摘する。

第一部 研究編の本編では、『唐虞之道』のメーン・テーマである堯舜禅譲説・愛親・尊賢の思想、及びそれらに付随する利天下而弗利・養生・知命・謙遜の合計七つの思想の分析に各一章を当て、それらの内容を詳密かつ多角的に考察して、それぞれの思想史的な位置と意義を解明する。その際、筆者は、中国の表面的で思想内容に深く立ち入らない研究に対して、鋭く明確に反対の意を表明するとともに、自らは必要な類似資料を古代文献の中より徹底的に渉猟し、関連する従来の中国や日本の研究論著を遺漏なく調査した上で、それらを一々引用し、善し悪しを批判的に検討しながら、『唐虞之道』の思想的真実に肉薄しようと努める。その結果、『唐虞之道』は、戦国後期の『荀子』正論篇より後、同じく成相篇より前に、既存の堯舜禅譲説を再構築しようと試みた儒家の一派が、先行する儒家・墨家・道家等々の諸思想を積極的に取り入れて成書したものという結論に達した。

また、研究編の附編では、『魯穆公問子思』のメーン・テーマである忠臣観を、先秦・秦・漢の主な文献資料における「忠臣」との比較を通して検討し、『魯穆公問子思』は『孟子』より後、『荀子』臣道篇や『墨子』魯問篇などより前に、社会的現実よりも理念を重視する儒家の一派の手によって成ったものと結論づけた。

第二部 訳注編は、以上の第一部 研究編における思想内容の考察の基礎をなす作業であるが、この部分だけ単独でも学問的に有意義な仕事と評し得る労作である。筆者は、難解な楚系文字を一字一句丹念に解読し、中国・日本を始めとする世界の、従来の見解のすべてに目を通し、それらを引用し批判的に検討しながら、合理的で妥当な解釈に到達しようと努める。なお、巻末の文献目録は、本論文提出当時は『郭店楚簡』についての、世界で最も完備したビブリオグラフィーであった。

本論文は、郭店楚簡『唐虞之道』と『魯穆公問子思』の思想内容に関して、研究史上初めて深く立ち入った本格的な解明を行った研究として、高く評価することができる。以上を総合して、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分に値するものと認定する。